

親との同居について考えていますか？ 家族みんなが快適・安心な 住まいづくりとは？

将来、在宅介護も視野に入れて、親と同居するつもりだという場合、
オヤノコト世代として事前にどんな準備をしておけばよいのでしょうか？
親との同居介護による住まいの変化について研究されている
住環境研究所の主任研究員 嘉規智織さんにお話を伺いました。

同居開始II介護開始 では必ずしもない

Q 親との同居を機に、住み替えや建て替えを行う人もいます。住み替えや建て替えを行う人にもいるということですが？

A 現在の住まいが狭すぎて、親の居住スペースを確保できないという場合、土地が十分に広ければ親との同居を機に増築や建て替えを行うケースがよく見られます。ただ、敷地も狭いという場合は、新たに土地を取得して住み替えるケースもあります。

Q 親との同居に関する気遣いや不安を減らすためには、どうしたら良いですか？

A 親と同居する前から少しずつ情報収集することだと思います。たとえば、将来の介護負担について気になるのであれば、行政の介護相談窓口で地域にどんな介護サービスがあるか確認することができます。また、同居前から介護保険適用外の家事支援サービスやNPOの配食サービスを少しずつ利用することで、無理をしないで介護を続けるための情報やノウハウを得ることもできると思います。

Q 親との同居を機に住まい変更をする場合、どのようなことに気をつけたいですか？

A 親の自立性を長く維持し、また、この介護負担を減らす住環境作りには留意する必要があります。たとえば、家の中にケガや病気の要因をつくらないよう、温度差・段差を減らす工夫をすることが挙げられます。また、玄関・アプローチは、親が社会とのつながりを保ち続けるた

親の自立性を維持し、 介護負担を減らす住環境は？

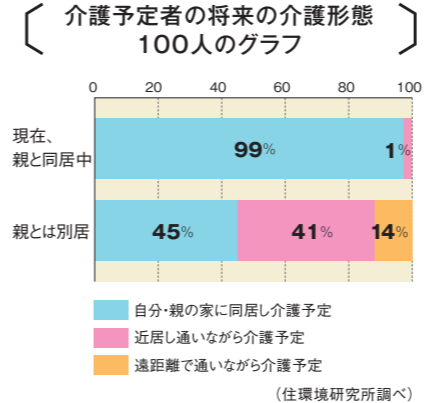
Q 親との同居を機に住まい変更をする場合、どのようなことに気をつけたいですか？

A 親の自立性を長く維持し、また、この介護負担を減らす住環境作りには留意する必要があります。たとえば、家の中にケガや病気の要因をつくらないよう、温度差・段差を減らす工夫をすることが挙げられます。また、玄関・アプローチは、親が社会とのつながりを保ち続けるた

Q 親との同居を機に住まい変更をする場合、どのようなことに気をつけたいですか？

A 親の自立性を長く維持し、また、この介護負担を減らす住環境作りには留意する必要があります。たとえば、家の中にケガや病気の要因をつくらないよう、温度差・段差を減らす工夫をすることが挙げられます。また、玄関・アプローチは、親が社会とのつながりを保ち続けるた

をする予定」という616名に「将来どのようなカタチで介護をするようになるか」とお聞きしたところ、現在、親と同居中と答えた人の99%が「自分の家・親の家に同居し介護」と回答したのに対し、親と別居している人では、この割合が45%にまで減っています。そして「近居し、通いながら介護予定(41%)」、「遠距離で



Q 東日本大震災の影響で耐震性を含めた家屋の安全性に対する関心も高まっていると思いますが、確かに老朽化は建て替えの要因になりますね。建物の耐震基準は1981年に改訂されていますが、東日本大震災の影響もあって、それ以前に建てられた住宅では耐震性能に不安があるため、建て替えるケースも増えるのではないのでしょうか？

A また、住宅のバリアフリーが進んだのはここ10年くらいのこと。それ以前に建てられた住宅の場合、バリアフリーが十分でないケースが多くみられます。その場合、在宅介護に支障をきたすだけでなく、家の中の転倒によるケガや室内温度の差によるヒートショックなど、介護が必要になる原因の予防も十分にできなくなっています。

親の自立性を維持し、 介護負担を減らす住環境は？

Q 親との同居を機に住まい変更をする場合、どのようなことに気をつけたいですか？

A 親の自立性を長く維持し、また、この介護負担を減らす住環境作りには留意する必要があります。たとえば、家の中にケガや病気の要因をつくらないよう、温度差・段差を減らす工夫をすることが挙げられます。また、玄関・アプローチは、親が社会とのつながりを保ち続けるた

Q 親との同居を機に住まい変更をする場合、どのようなことに気をつけたいですか？

A 親の自立性を長く維持し、また、この介護負担を減らす住環境作りには留意する必要があります。たとえば、家の中にケガや病気の要因をつくらないよう、温度差・段差を減らす工夫をすることが挙げられます。また、玄関・アプローチは、親が社会とのつながりを保ち続けるた

通いながら介護予定(14%)と、別居介護派が過半数を超えました。

Q つまり、必ずしも「同居II介護」ではないということですね？

A そうです。実際、介護が必要になるのは、親が85歳以上、子が55歳以上になってからが多いですから、親御さんがそれより若く元気な場合、同居してもすぐに介護が必要になるわけではありません。また「両親が健在の場合、どちらかが要介護になった場合でも、お元氣な方が介護をし、子はサブ的に親をサポートする」というケースも多く見られます。ただし、お父様がお母様の介護をされるというケースでは、他人の身の回りの世話をする経験がない方も多いため、子が同居して積極的に介護をサポートしなければならぬ場合もあります。

早めの情報収集で 同居への不安を解消！

Q オヤノコト世代が、将来親と同居するにあたって不安に感じる点にはどのような事柄があるのでしょうか？

A 前述の調査では、現在親と別居している人の場合、「同居のタイミング」のほかに「同居にともなう生活上の気遣いへの工夫」に対する関心が非常に高くなっていました。親と同居した上で、生活が具体的にイメージできないため、あれこれ思いを巡らせているのかもしれないですね。

めにとっても重要な役割を果たします。足腰が弱まったときのためにベンチを置くスペースを確保したり、車いすでも通りやすいよう、スペースを広く取るよう心がけましょう。

また、介護のための住まい変化で最も一般的なのは、手すりの取付などのリフォームですが、それでは十分に対応できない場合、建て替えや住み替えを考慮したほうが良い場合もあります。在宅で介護をする可能性を視野に入れながら、そのための情報収集も同居される前から子の主導で進められると良いと思います。

希望者に進呈いたします！



親との同居などライフステージの変化に合わせた住環境整備において気をつけなければいけないポイントをまとめた、冊子「ずっと安心。いつもびったり。」をご用意しました。これから何十年先までの暮らしにもきちんと対応できる住まいについての情報収集に、ぜひお役立てください。

※お申し込みは、巻末のFAXシートまたは総申し込みハガキをご利用ください。オヤノコトnetからもお申し込みできます。

大きさと柔軟さで、長持ちする家をつくる。セキスイハイムのテクノロジー

高い資産価値を将来も維持

セキスイハイムは築20年以上でもスムストックの対象です。



- <スムストックの条件>
- 住宅履歴データベースがある
 - 50年以上のメンテナンスプログラムがある
 - 一定以上の耐震性がある
- ※エリア・商品タイプ・年代によっては対象外となる場合があります。

セキスイハイムの住宅は耐久性・変換性に優れているため、優良なストック住宅として高価値で売却されています。将来、老人介護施設に入居したいというような場合にも、適正に建物の価値を評価することができます。

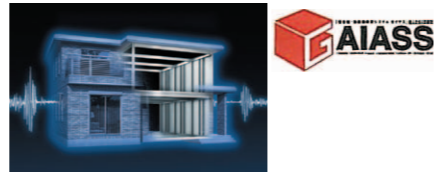
ソーラー住宅 No.1



※太陽光発電システム搭載住宅(リフォームを含む)のセキスイハイムグループ販売実績100,000棟(2011年4月現在は業界1位です(積水化学調べ))

10万棟の販売実績を誇るセキスイハイムのソーラー住宅は、フラット屋根が中心なので、ソーラーパネルがたっぶりと載せられます。また、気密・断熱性も高いので光熱費も大幅に節約できます。

家そのものが耐震装置



東日本大震災で改めてその重要性が認識された住宅の耐震性能。セキスイハイムの住宅は、独自の複合耐震システムを備え、巨大地震に備えます。

洗いが広いから介助が楽



車いすでも入りやすいよう脱衣所からの開口部分を大きくとり、段差をなくす。洗体介助がしやすいよう洗い場スペースを広くとるなど、介護負担を減らす工夫がほどこされたセキスイハイムの浴室。

可変性を支える構造体



セキスイハイムは強度に優れた「ユニット」の柱と梁で建物を支える基本構造のため、室内空間の可変性が高く、建築時の間仕切りの多くは外したり、移動させたりすることが可能です。



株式会社住環境研究所 市場調査室 主任研究員 二級建築士 福祉住環境コーディネーター二級 嘉規智織氏

オヤノコト エキスポ 暮らしのゾーン(住まい)

7月16日(土)
13:30~14:30
セミナールームにて
嘉規智織氏による
「親の介護と住まい」を
テーマにした
講演があります。